AJU 愛光園だより 低料第三種郵便物承認 2020年1月21日発行（増刊）

二〇二〇年一月二十一日発行（増刊）（毎週火曜日）AJU通巻一三七三一号 昭和五十四年八月一日 低料第三種郵便物承認

AJU 愛光園だより

～私たちは、誰もが人間としての尊厳が保たれ、安心して共に生きる社会をめざします～

編集者：社会福祉法人 愛光園　企画総務部
愛知県知多郡東浦町緒川東米田33番3
TEL 0562-83-9835　FAX 0562-83-4344
URL http://www.aikouen.jp/　E-mail honbu@aikouen.jp

第１５７号

多くの皆様に感謝を込めて～愛光園30周年記念式典～

障がい者活動センター愛光園　　施設長 多田 真

平成の幕開けと共に肢体不自由児通園施設から成人の知的障害者更生施設（通所）に様変わりした愛光園が、30周年を迎えるに至りました。

令和元年11月19日(火)、150名近くの来賓、ボランティア、ご家族、法人関係者の皆様と愛光園の仲間・職員が一堂に集い、30周年記念式典を催すことが出来ました。

当日は、少し風が強かったものの、心配されていた前日からの雨も上がり、好天にも恵まれて晴れやかで賑やかな正に愛光園らしい式典となりました。

開会宣言後の、日高理事長、皿井相談役、廣瀬理事からの挨拶には、児童通園の時代から重い障がいのある方たちを中心に据えた愛光園の歩み、それは決して平穏な航海ではなく、荒波にもまれた歳月であった事、それでも進路を見失うことなく今日を迎えられたことは、そこにその人らしい精一杯生きる姿を現し続けた仲間たちがいて、それを支えて下さる多くの方たちの尽力があったからこそであるとの熱いメッセージが込められていました。

次には、来賓・ボランティアの皆さまの紹介をいたしました。30周年という節目の年に、お一人お一人がどのように愛光園と関わって下さっているのかを改めてご紹介出来たことは、感謝の気持ちを新たに、繋がりを大切に深めて行ける良い機会であったと思います。

帰りの送迎車中で、「自分たちの取り組みがこのような形で活かされている事を改めて知り、うれしかった」と言われたボランティアさんの一言は、私にとってこの上ないものでした。

さらに続いて、スペシャルゲスト福田直樹さんのピアノコンサートとなりました。福田さんは、愛光園が大府市の共和にあった時代から四半世紀にわたり毎年秋のコンサートで来園下さり、仲間と呼応することを楽しみつつ演奏して下さる方です。この日も福田さんからのご提案でピアノを仲間たちが囲んでの演奏となりました。各々が自由なスタイルで聴くことが出来るこのコンサートは、仲間にとっても傍にいる人たちにとっても、今回もまた至福のひと時となりました。

そして式典も後半となり、愛光園側から出席くださった方々への返礼ともいえる、スライドショーを使った仲間の日々の紹介や言葉が映し出されました。懐かしいシーンやベストショットに、皆さんから笑顔と歓声があがり、少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうに画

像をチラ見する仲間の姿が印象的でした。

「このスペースに100人を超える人を迎えられるのか。動きが取れないのでは…」と心配していたプレゼント・花束贈呈も職員の連日・連夜にわたる話し合いと工夫ある準備で無事終え、ボランティア代表の鈴木明恵さん、家族会会長水野さんからもとても心の込もったあたたかいご挨拶をいただき、いよいよ結びの『愛光園の歌』の合唱となりました。野畑秀弘さん作詞、廣瀬治代さん作曲で児童通園の時代につくられたこの歌を今回の式典で復活・合唱できたことは、愛光園船出前の思いを共有し、航跡を辿り、今後の航路を展望する上でも有意義であったと思います。

多くの方々のご協力を得て、この度の愛光園30周年記念式典を挙行することができました。

数えきれないほどのお力添えに感謝を込めて御礼申し上げ、ここに報告させていただきます。

愛光園30周年記念式典

日高理事長より挨拶

福田さんコンサート

花束贈呈

愛光園の歌 合唱

台風19号長野県災害ボランティアに参加して

法人本部長 桑山 利和

台風19号は東日本を中心に各地に大きな被害をもたらしました。東浦町社会福祉協議会が主催して長野市の支援をするボランティア募集があったので参加してきました。

11月27日朝2時半に出発して、バスで長野市北部に向かい、その夜9時に帰ってくるという日帰りです。場所は長野市赤沼地区。テレビにもよく映っていた新幹線が水に浸かった車両基地のすぐそばです。長野市内は特段変わった様子はありません。しかし被災地区になると、町全体が白っぽくなります。道路の泥は撤去されていますが、町全体に白く乾いた泥が付いているからです。さらに進むと、道路の両脇に泥の山が目立つようになってきました。

ボランティアの受付は特別養護老人ホームりんごの郷。その特養は被災して、たくさんのベッドが庭に出されていました。ボランティアの内容はリンゴ農園の復旧でした。5人で1つ班を作り、班長を決めます。班長経由で指示があり、説明や道具の支給など、とてもシステマティックになっていました。帰りも道具を洗う人、ボランティアの長靴を洗う人、うがい薬を渡す人、みそ汁を用意してくれる人というように、役割分担がしっかりできていて、被災して1か月経ったなあと感じさせられました。

私の班の仕事は、リンゴ畑に散乱しているごみの片づけと、木の周り半径2メートルの泥の撤去。リンゴ畑一面に泥が15センチくらい覆っていて、その上にケースや脚立が散乱し、リンゴも腐りかけた状態で落ちていました。木に付いていたリンゴもかなり傷んでいました。まずごみを回収。ごみにも泥がついているので、撤去しようとすると泥の粉が舞い散り、目に入るし鼻にも入る。ゴーグルやマスク着用という意味が分かりました。30分作業しては休憩し水分補給。ごみが無くなると泥の撤去ですが、泥が半分乾いていて硬くて重い。作業は、途中1時間の昼食をはさんで3時までで正味3時間程度でしたが、へとへとでした。

昼休憩に散策したのですが、土塀が壊れていたり、床板を外して乾燥させている家がほとんど。ビニールハウスも多くが壊れていました。1か月以上経っていましたが、復旧はまだまだこれからという感じでした。報道はされなくなったものの、大変な状況が続いています。これで雪が降ったらどうなるのでしょう。

1日だけでしたが、被災の現場に行ってとても勉強になりました。災害対策を進めるとともに、継続して支援をしたいと思いました。

現地の様子

【ボランティア受付】

【リンゴ園】
泥が付いた箱が積まれています。

【リンゴ園】一面、泥で覆われれいます。右下には、落ちたリンゴが集められています。

第15回社会福祉法人愛光園実践発表会を終えて

ファシリテーター 高齢福祉事業部長 青山 誠

昨年12月14日にあいち健康プラザにて第15回実践発表会を開催しました。テーマは「助けあい・認めあう共生社会～自立支援を目指して～」と題して3題の発表がありました。今回私は発表に関する質疑や、来場者とともにテーマに沿って全体討議を進めるファシリテーター（進行役）を務めさせていただきました。

1題目の発表は老人保健施設相生・通所リハビリテーションより、「利用者のありたい姿の実現を支援する施設」とするため、デイケア食堂より広いデイケアホールに活動場所を引っ越しした事例です。これまでは「上げ膳・据え膳」など、利用者への「おもてなし」が良いサービスであるとして取り組んできましたが、「出来る事は自分で行う」というコンセプトに改め環境を整えました。例えば脳トレプリントの設置場所を変更し、自ら選んで取り組みやすくしました。またドリンクサーバーを設置して、飲みたい飲み物を自分で用意する、昼食はバイキング形式とし、自ら選んで配膳するなどです。変更当初は利用者から戸惑いの声も聞かれましたが、リハビリが目的の施設であることを丁寧に説明し、自己選択・自己決定を行う機会を増やすことで利用者の意欲が向上し、施設を卒業していく利用者が現れたとの発表でした。

2題目は地域生活支援センターりんくより、体調不良から医療的ケアが必要となり、地域の医療機関と連携して、利用者のグループホームでの生活を支えている事例です。肺炎による胃ろうの増設や、唾液による誤嚥のリスクを避けるための気管切開による喉頭分離の手術を受けられ、日々医療的な管理が必要な状況となりましたが、地域の医療機関からの訪問診療や訪問看護を活用しての気管カニューレの管理や、訪問リハビリによる痰を出しやすくするアプローチを行うなどの連携体制を構築していきました。不安を抱えながらも医療的なバックアップ体制が整ったことで、これまでの「グループホームおあしす」での生活を継続することができ、現在は愛光園への通所も再開され、仲間との交流やプログラムを楽しまれているとのことでした。

3題目はあったか生活支援センターから、体調不良により入退院を繰り返しながらも、仲間との生活の場であるグループホームで最期を迎えられた利用者の事例です。知的なハンディキャップがありコミュニケーションが取りづらい状況でも、日々の暮らしの中から本人の行動や想いを大切なメッセージとして受け取り、住み慣れた仲間たちとの暮らしを支えました。入退院を繰り返し3度の手術に耐えモルヒネを投与しながらも、本人らしさを大切にしてホームでの看取りを行ったとのことでした。

全体討議では「施設やグループホームで可能な看取りについての基準があるとありがたい」との意見や、「親亡き後の生活のイメージが持ててよかった」などの感想が述べられました。また医療的ケアが必要な利用者の生活支援の課題や、親御さんの不安な想いや葛藤と向き合うことの大切さについての貴重な意見もいただいています。

今回の実践発表を通して自己選択・自己決定を大切にして、利用者の自立（自律）を支えることが、支援者自身の自立（自律）につながっていることを感じました。できることの限界があることも事実ですが、相互の自立支援を通して自己肯定感を育み、本人らしさ、愛光園らしさを大切にしていきたいと思います。また「助けあい・認めあう共生社会」の実現に向けて努力し、地域のみなさんのお力を借りながら、この発表会で得られた学びを日々の実践につなげていきたいと思います。

当日ご来場いただきましたみなさまにアンケートをお願いしました。
ご意見・ご感想の一部をご紹介します。ご協力ありがとうございました。

実践発表①『通リハお引越しプロジェクト～「出来る事は自分で」行える環境を目指して～』
〈発表者〉介護老人保健施設相生 通所リハビリテーション　河合 真衣　湯浅 修治

― ご意見・ご感想 ―

・高齢者の増加により、ますます「できることは自分で」という考えが必要になってくると思う。（利用者家族）
・自分達が行っている支援、介護は本当に「やるべきこと」「やらなくてはいけないこと」にはまっているのかどうか、立ち止まって考えることはとても大切だと感じました。大きな変化を試みる・・・そんなことが自分達にもきでるような支援者になりたいです。（職員等関係者）
・自立の視点からも「通えば良い」ではなく、その先にあるお一人おひとりの暮らしや、夢の実現のために大切な意欲を支えることは大変だと思いました。それでも支援者も苦労しながらもイキイキと動かれているのが印象的でした。（職員等関係者）

実践発表②『Eさん、お帰りなさい～医療的ケアと向き合うホームでの暮らし～』
〈発表者〉地域生活支援センターりんく　西島 壮太郎　田中 優

― ご意見・ご感想 ―

・本人の望む生活を実現していくために、どう動くことが大切なのか？を考える機会となりました。本人、ご家族と向きあうこと、多職種との連携をすること、言葉で話すことは簡単ですが、このように本人の生き生きした表情を見ることができ、その難しさと、本来やるべき姿勢だと感じました。（一般）
・度重なる困難にも関わらず、本人に寄り添う支援が出来ていると思う。（利用者家族）
・それぞれの事業所で、支援度が上がる中で、連携をしながら一人の方を支えていくことがこれからの方の支援につながっていくことが伝わってきました。事業所のわくをこえて、協力ができることがあれば・・・と思いました。（職員等関係者）

実践発表③『Mさんから受け取った「モノ」～発信者としての本人を考える～』
〈発表者〉あったか生活支援センター　稲生 直幸

― ご意見・ご感想 ―

・Mさんと利用者さんとの絆があり、支援者だけでなく利用者さんも思いがあると気づかされました。Mさんから教えられることたくさんありました。（一般）
・ホームが家庭の代りになっていると思った。スタッフの接し方が「仲間と共に」となっていると思う。（利用者家族）
・寄り添った支援というのは、支援者から利用者への一方的なものではなく、お互いに、ある意味では支援者も利用者に支えられている部分があるということを改めて考えました。（学生）
・支援者としてグッとくるものがある。考えさせられる発表でした。ホーム、入所施設の職員は、その利用者の方、まるごとを受け止めているので、その方の逝き方も共に考えられる。それは重い仕事ではありますが、支援者として、これほど勉強になることはないなぁと感じました。（職員等関係）

＊発表事例について詳細が知りたい方は、法人ホームページでご覧いただけます。
http://www.aikouen.jp/トップページのお知らせをご確認ください。

全国知的障害福祉関係職員　研究大会に参加して

知多地域障害者生活支援センターらいふ　支援員 佐藤智洋

昨年の10月22日から24日、鹿児島県で行われた全国知的障害福祉関係職員研究大会に参加してきました。今回は『未来へ！福祉の力と共生社会』というテーマに沿って、厚生労働省職員や地域共生社会に詳しい大学教授、共生社会に向けて実践している福祉施設関係者、また実際に施設を利用している当事者、デザインの力を使って地域づくりを実践している会社の代表など、様々な方面からの講演を聴くことができました。この研修に参加し、私が感じた中で、今後大切にしたい三つのことを、報告したいと思います。

まず一つは、支援者としての価値観に捉われず、障がいのある人の個性を、本人の強みとしてありのままに受け止めることです。生活介護事業でアート活動をしている『しょうぶ学園』のある利用者さんは、スプーンに傷をつけるこだわりがあり、当初職員はその行動をどう止めるか考えていました。しかしある時、考え方を変え、その行為を止めるのではなく、一つの文化として捉え推奨し、傷のついたスプーンという作品にして売り出したことで、問題行動を繰り返す利用者ではなく、唯一無二の作品を生み出すアーティストに変わったそうです。しょうぶ学園の職員は、自分たちと障がいのある人のズレ（意志表出方法の違い）に気づき、本人の価値観を見極める豊かな感性を持つことを大切にされていました。また、自分たちの枠（価値観）に障がいのある人を入れようとすると、お互いに苦しくなり、職員が頑張れば頑張るほど本人の意思決定力を奪ってしまうことも自覚していました。

二つ目は、意思決定支援を伴う本人主体の生活を支えるためには、知的な差に関係なく、本人の好きなことに着目し、自分で選んで決められる環境を設定することが必要だということです。『沖縄大学』の島村聡教授は、本人主体とは社会通念や既存の制度の枠から生まれる「ニーズ」から障がいを捉えるのではなく、常に本人に寄り添って「想い」を捉え、主体性を引き出すことであると言われました。また、地域生活支援事業所の『イズム・あおぞら』というグループホームでの実際の生活が紹介され、住人の方は、余暇の過ごし方や食事メニューなどを自分なりの方法で選択し、決めていく生活が確保されており、自分らしく暮らしていました。当事者の語りでは、今の生活にある程度満足しつつ、今後は一人暮らしがしたいという夢も語っていました。

最後に、地域共生社会の実現に向けての取り組みです。これから少子高齢化社会がさらに進み、人材不足が予想される中で、福祉関係者だけではなく、それ以外の人たちや地域資源も含めて、お互いが支え合える社会を目指す必要があると思いました。いかに地域住民を巻き込むかに関して、『studio-L』代表の山崎亮さんは、福島県に建設したアートブリュットの美術館を例に挙げました。近隣住民が立ち寄りやすい美術館にするために、建設準備段階でスタッフが美術館建設予定地の近所に住み込み、地域住民とコミュニケーションを深め、住民からも美術館への意見を募り、様々な場面で一緒に作り上げたそうです。そうやって、地域住民と一緒になって作り上げることで、他人事ではなく自分事になると話されていました。

障がいのある人をありのままに受け入れ、その人らしい想いを受け取り、地域の人たちと一緒に、その想いを叶えられる、そんな社会を目指して今後も実践していきたいと感じた研修でした。

全国老人保健施設記念大会　参加報告

高齢福祉事業部長　青山　誠

今年の全国老人保健施設大会（以後：全老健大会）は、第30回の記念大会となり、参加者4697名が集い、大分県大分市（一部別府市）にて令和元年11月20日～22日の3日間の日程で開催されました。今年のテーマは「地域と共に紡ぐ令和老健～豊の国から真価・深化・進化～」とされ、地域と深く密着した施設、高齢者への良質な支援、介護と医療の連携等の充実を図り、2025年以後に団塊の世代が後期高齢者となることを見据えた、老人保健施設の今後さらなる発展を目指すというものです。

全老健大会は記念講演やシンポジウム等も興味深いのですが、何といっても日ごろの実践や研究の成果を報告する、職員による演題発表が充実しています。今大会では7会場・24部屋に分かれて1169題の取り組みが熱く伝えられました。発表内容は、ケアの質の向上・リハビリテーション・在宅支援・在宅復帰・地域貢献など多岐にわたります。1169題すべてを聞くことはできませんから、自ら興味があるものを事前に選んでスケジュールを組み、7会場を駆け巡ります。その中で今回特に参考になった発表は、「IoTの活用」と「看取り支援の充実」についてです。「IoTの活用」では、朝夕15分から20分程度時間をかけて行っている職員間の申し送りを、情報共有ソフトの活用により廃止し業務改善を行った事例や、利用者の自宅に通常多職種が出向いて実施している会議を、相談員一人がタブレットを持参し、テレビ電話機能を活用して施設とつなぎ会議を行うなど、業務の効率化を図った事例が参考になりました。また「看取り支援の充実」においては、イラスト付きで分かりやすい看取りのためのパンフレットを作成し、事前に本人や家族と話し合う「人生会議」の取り組みの実施や、利用者がご逝去されたときに、施設内全館にショパンの『別れの歌』を流し、皆でご逝去を悼む取り組みなど心揺さぶられるものがありました。

私たち相生からも通所リハビリより「出来る事は自分で行える環境を目指して」と題して、自立支援の取り組みについて演題発表をさせていただきました。発表は最終日であったため、同行した二人の職員は3日間緊張の中での研修でしたが、座長からの質問に適切に答えられ、素晴らしい発表となりました。お疲れさまでした。

また大分県を満喫すべく湯布院観光や水族館「うみたまご」で開催された懇親会への参加、関アジや関サバ・とり天などのご当地名物もたくさんいただき、職員との交流も図れて充実した3日間となりました。今回得られた学びをできることから私どもの実践に活かしていけたらと思います。

老人保健施設相生　通所リハビリテーション

介護職　河合　真衣

相生通所リハビリテーション、は2019年4月に活動場所・考え方など少し変更しリニューアルしました。名付けて『通リハお引っ越しプロジェクト』です。老健大会にてその取り組みを、相生代表として発表させて頂きました。「出来る事は、ご自分で行って頂ける環境」「自立支援」「いつでもリハビリが行えるように」など我々の取り組みでお伝えしたい事が山のようにあり、7分間の発表にまとめるのは大変でした。発表では通リハでのサービス提供にあたって、過去の反省→現状の把握→対策の検討→新しい取り組み実施の過程をお伝えしました。

普段の業務で実施内容を振り返る事はあまり無いので、このような機会を頂けたことでサービス整理の機会となりました。また、老健大会では他の施設での取り組み発表を聞く事が出来ました。自分たちが新しい取り組みをするように、他所でもサービスの内容は日々、検討して進化させています。とても参考になり自分たちも"負けてられない"と感じられ、良い刺激となりました。

最後に大分県は美しい景色、美味しい食べ物など素晴らしい物ばかりで癒しの研修となりました。刺激を受け、癒された事で明日からの業務にも精一杯、励む事ができそうです。

老人保健施設相生　リハビリ

作業療法士　松葉　桃子

今回の老健大会にて、〝「出来ることは自分で」行える環境を目指して"と題し、4月に引っ越しを行った通所リハビリでの取り組みについて発表しました。活動スペースが集約され広い場所が確保できたことにより、ご利用者の自己選択・自己決定できる機会が増え、多職種間での連携が取りやすくなりました。以

二〇一九年一月二十一日発行（増刊）（毎週火曜日）発行所・東海身体障害者団体定期刊行物協会 名古屋市中区丸の内三―六―四三 みこころセンター四階 定価一〇〇円

前に比べ、ご利用者の自発的・選択的な行動が増え、ありたい姿の実現が行いやすい環境に近づいたように感じます。今回の発表を通して、ご利用者の良い変化に気づくことができた一方で、今後より良いサービスを提供するための課題もいくつか挙げられました。挙げられたどの課題に取り組むにあたっても共通して多職種連携は重要となってきます。各職種の専門性がより発揮しやすい環境づくりを行っていくために、日々のコミュニケーション方法について再度見直し、ご利用者のニーズを多職種で共有できるよう努めていきたいと思います。

他施設の発表においても、多職種連携の難しさは課題として挙げられていることが多かったように感じます。他施設での取り組みも取り入れつつ、研修で得た情報を日々の業務の中で生かしていければと思います。

認知症サポーター養成講座 開催します！

「認知症サポーター」とは？？
認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする人のことです。

どなたでも参加できますので、この機会に私たちと一緒に認知症について学びませんか？？

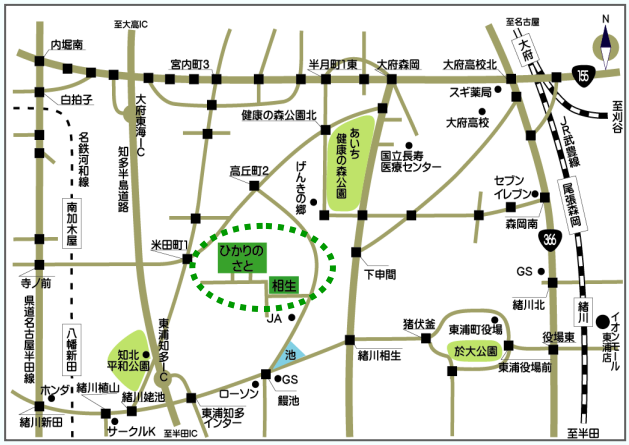
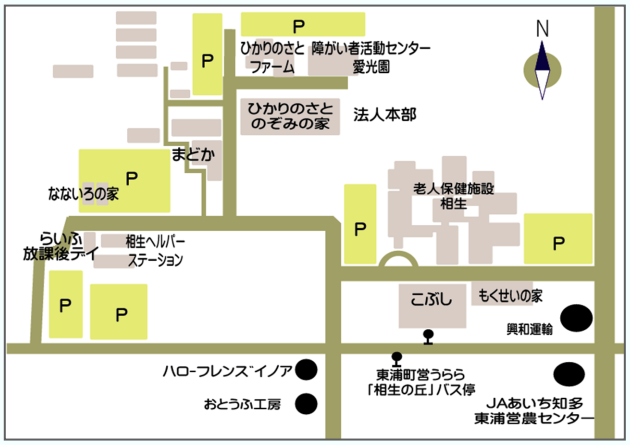
日　時：1月28日（火）
14：00～15：30
場　所：老人保健施設　相生
（ミーティングルーム）
講　師：職員　鈴木　勇人
（認知症サポートキャラバンメイト）

参加をご希望の方は、1月27日（月）までに、電話またはメールでお申し込みください。

電　話　0562-83-9835
メール　katayama-m@aikouen.jp
担当　企画総務部　片山

ホームページやFacebookも随時更新しています。ぜひ、ご覧ください！

ひかりのさと アクセスマップ



- ＪＲ東海道線大府駅下車、タクシー（１５分）が便利です
- 東浦町営バス（うらら）停留所「相生の丘」から徒歩２～５分